



Book Review

評者: 吉田みつ子
日本赤十字看護大学看護学部

対話と承認のケア ナラティブが生み出す世界

著: 宮坂道夫 / 本体: 2400円 + 税
発行: 医学書院 / TEL: 03-3817-5650



「ナラティブ」から問う、看護とは？

本書は、これまで私のなかに浮かんで消えていた「ナラティブ」にまつわる2つの問いについて考える機会を与えてくれた。

1つは、ナラティブ、ナラティブ・アプローチという一種のムーブメントが、医療、ケアのあり方に何をもたらすのかという問いである。看護現象を説明するための理論的基盤を探し求めてきた看護学は、関連領域の理論を取り込んできた歴史がある。ゆえに、新しいムーブメントにはいつも敏感である。本書は、ナラティブがヘルスケアにもたらすムーブメントの意味を、実在論と構築論という二つの疾病観に基づくヘルスケアを対比することによって浮かび上がらせる。医学論文で推奨されるエビデンスに基づく標準化された治療やケアを提供することを重要視する医療を「実在論的ヘルスケア」、ナラティブ・アプローチに基づく疾病観と医療を「構築論的ヘルスケア」とし、これらを二項対立図式においたときに何が見えるのか議論されている。構築論的ヘルスケアにおいては、病気の原因は独立して存在しないし、唯一正しい説明もない。病気はそれを語る患者や、他の複数の人々の「文脈性をともなった語り」に基づいて構成されたと考えられる。よって、医療従事者が実在論的な医学的解釈枠組みに沿って都合よく話を聞こうとすることはナラティブ・アプローチからは外れる。「ナラティブ」の世界観においては、医療者がもつ知識や

それに基づく解釈も、患者の語りと同等に位置づけられる。つまり「ナラティブ」は医療に携わる者が専門性のとらえ方を根本から転換することを求めている。

もう1つの問いは、患者の語りを聴くことが看護ケアとしてどのような意味をもつかである。著者は、他者の「ナラティブ」を「解釈」「調停」「介入」することが「専門的な」ケアになりやすいのは、臨床心理士のような職業的枠組みや相談外来のような制度のなかである場合だと述べる。すると看護師が行っている患者の話を聴くという行為は、「特に専門性のあるものではなく、自分たちが実践知として身につけているもの、あるいは看護の世界でよく言われる『患者のニーズに応える』という、いつもどおりの実践の1つ」と見なされてしまうと疑問を投げかける。確かに、患者の身体をともなった「ナラティブ」は、看護師を否応なしに巻き込み、逃げ出すこともとどまることもできない状況に追いやる。のっぴきならない状況だからこそ生まれる対話がある。意図的に行われるばかりではない、看護の「聴くこと」をどう説明すればよいだろうか。これは簡単には説明できそうにないので、本書から与えられた私への宿題としたい。

本書はナラティブの学問的・実践的意味を問う学術書であり、看護とは何かを問いかけられた1冊でもあったように思う。